

岡本喜八顕彰事業『岡本喜八 第100回生誕祭』

令和5年度優秀映画鑑賞推進事業

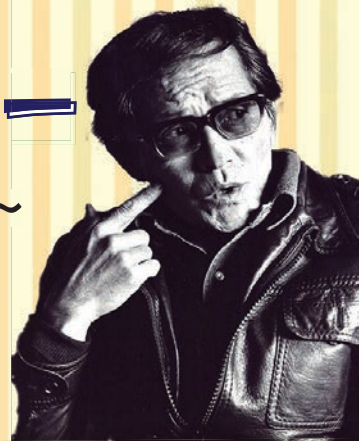
令和5年度鳥取県文化芸術活動支援補助金助成事業

米子名画シアター & トークショー

令和6年 2月18日(日) 開場 午前9時30分～

会場 米子市公会堂 大ホール

チケット取り扱い/米子市公会堂・米子市文化ホール
米子市淀江文化センター・米子市立山陰歴史館



壮絶な戦場や一変した日常など、戦時下で危機的状況を生きる人々を克明に描いた

米子市出身 岡本喜八監督作品

「会いに行く！
昭和のやんちゃ男子&男の中の男たち」

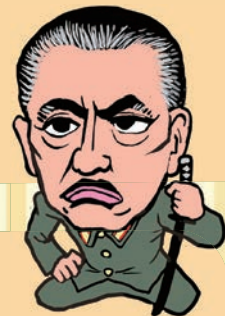


独立愚連隊



日本のいちばん長い日

- 10:00～11:48 (108分) 独立愚連隊
- 13:00～13:45 利重剛&ゴロ画伯トークショー
- 14:00～16:37 (157分) 日本のいちばん長い日



利重剛&ゴロ画伯トークショー

岡本喜八監督と親交のあったお2人が、知られざる監督の姿を語ります。



利重剛

【利重剛プロフィール】

1962年生まれ、神奈川県出身。81年、自主制作映画「教訓I」がPFFに入選。岡本喜八監督「近頃なぜかチャールストン」では、主演・共同脚本・助監督を務める。主な監督作品に「ZAZIE」(89)、「エレファントソング」(94)、「BeRLiN」(95)、「クロエ」(01)、「さよならドビュッシー」(13)などがある。俳優としても活躍し、数多くの作品に出演している。



ゴロ画伯

【ゴロ画伯プロフィール】

本名、松村宏。1962年生まれ、米子市道笑町出身。自作自演のライブ漫画家。「エレキ紙芝居」というステージ活動を全国各地で上演している。映画「おくりびと」「どろろ」などの絵コンテ担当。岡本喜八監督のお墓がある西念寺役僧。地域おこしNPO法人喜八プロジェクト理事。世界妄想学会副会長。

主催: 岡本喜八顕彰事業実行委員会・米子市・(一財)米子市文化財団【米子市公会堂】・米子シネマクラブ・国立映画アーカイブ
特別協力: NPO法人喜八プロジェクト・米子ガイナックス株式会社・文化庁・(一社)日本映画製作者連盟・全国興行生活衛生同業組合連合会・東映株式会社・東宝株式会社
駐車場: ひまわり駐車場(1時間無料)、YEASTY PLACE(1時間無料)、米子市役所駐車場(6時間無料) ※無料処理をしますので、必ず駐車券をお持ちください
バス割引券: 市内路線バスで当日(2/18)のみ使える200円割引券をお配りします。ご希望の方は、チケット購入時にお申し付けください。
※往復ご利用の方は2枚お配りします。 ※小学生以下は使用できません。

お問い合わせ: 米子市公会堂 ☎(0859) 22-3236



岡本喜八顕彰事業『岡本喜八 第100回生誕祭』

令和5年度優秀映画鑑賞推進事業

米子名画シアター&トークショー

「会いに行く！昭和のやんちゃ男子&男の中の男たち」

貴重な35ミリフィルムでの上映会です。米子市公会堂の巨大銀幕でお楽しみください。

独立愚連隊 [1959年 東宝](白黒/シネマスコープ/モノラル/108分)



[スタッフ]脚本・監督 岡本喜八 ほか

[出演者]佐藤允、雪村いづみ、鶴田浩二、三船敏郎、夏木陽介、上原美佐、江原達怡、南道郎、中谷一郎、中丸忠雄 ほか

成瀬巳喜男、マキノ雅弘らに師事した岡本喜八は、デビュー作『結婚のすべて』(1958)で斬新な娯楽映画の旗手として注目され、翌年『独立愚連隊』を世に送る。太平洋戦争末期の北支戦線を舞台に、独立愚連隊と称する前線の哨隊で命を絶った弟の死に不審を抱いた元軍曹が、従軍記者に扮して部隊に潜入、事件の背後に潜む上官の不正を暴きだす。シナリオ作家協会賞を受賞した自作の脚本をもとに、西部劇のエッセンスをパロディとして活かしながら、日本映画の伝統には見られない活劇調の戦争映画を作り上げた。終戦時に予備士官学校に籍を置いていた岡本の戦争に対する屈折した思いが、アクション映画の意匠から滲み出てくる。バタ臭い魅力を放つ佐藤允を主役に、中丸忠雄、中谷一郎、ミッキー・カーチスら個性派俳優、鶴田浩二や三船敏郎が各々ユニークな役どころを演じ、痛快な娯楽作を盛り立てている。本作のヒットにより、「独立愚連隊」はシリーズ化され、その後、岡本は大作『日本のいちばん長い日』(1967)を手がけることになる。

日本のいちばん長い日 [1967年 東宝](白黒/シネマスコープ/モノラル/157分)



[スタッフ]原作 大宅壮一、脚本 橋本忍、監督 岡本喜八 ほか

[出演者]三船敏郎、笠智衆、山村聰、宮口精二、戸浦六宏、志村喬、加藤武、高橋悦史、中丸忠雄、黒沢年男、天本英世、伊藤雄之助、小林桂樹、加山雄三、新珠三千代、松本幸四郎、仲代達矢 ほか

1945(昭和20)年8月14日正午、御前会議によるポツダム宣言受諾の決定から、翌日正午の天皇による玉音放送にいたるまでの一日を描き、「大宅壮一編」として出版された半藤一利のノンフィクションを原作に、東宝がその前身となる写真化学研究所(P.C.L.)のスタジオ建設から35周年を記念する作品として映画化。橋本忍の脚本を得て、岡本喜八監督が日本映画界を代表する男優陣総出演ともいえるキャストを、メリハリのある演出でさばき、日本映画史に一ページを画する大作に仕上げた。天皇による詔勅の文面が決定されるまでの前半は、陸相と海相とのやりとりで見られる緊迫した言葉のドラマを軸に展開され、後半は一転、終戦を阻止しようとする陸軍青年将校らによるクーデター計画を中心に、厚木航空隊、横浜警備隊の動きを絡ませながら、怒涛のようなテンポによる活劇が繰り広げられる。天皇が詔勅を録音するシーンと厚木基地での出撃場面のカットバックなど、戦中派である岡本のやるせない思いが細部にまでしみわたり、先の見えない国難に戸惑う者たちの心情が観る者の胸に迫ってくる。本作の成功により、東宝は以後6年間に亘り、「8.15シリーズ」と称した戦争映画を連作、岡本も1971年に再び大作『激動の昭和史 沖縄決戦』を手がけている。「キネマ旬報」ベストテン第3位。

